

バカと一途の純愛者 Re.MAKE

koueisyoku

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

試召戦争が終わり、学園祭が始まる少し前に転校生がやってきた。

その転校生は、世界中を飛び回っていて、親から様々な技術を受け継いだスナイパーであり、工員でもあり。

明久の幼なじみである。

そんな彼女の奮闘記である。

以前R18で投稿していた作品のリメイクです

つたない作品ですがどうぞよろしく願います

# 目次

## 転校生編 (導入部)

episode 0 　くケツベツノハジマリく　＋キャラクター紹介

1

episode 1 　くサイカイトキョウガクく　――

episode 2 　くテイタイノゴゼンく　――

episode 3 　くカレトノカンケイク　――

episode 4 　くアットウテキタルボウリヨクく　――

episode 5 　くヒトトキノキユウソクく　――

episode 6 　くソノヒノオワリトスベテノハジマリく

18

## 清涼祭編 (原作2巻あたり)

episode 7 　くマツリノウブゴエく　――

episode 8 　くサイテンカイシ　――

24

21

## 転校生編 (導入部)

episode 0 ～ケツベツノハジマリ～ +

### キャラ紹介

私は、アナタを守りたい

私は、アナタの傍にずっといたい

けれど、この返り血で染まった私に資格はない

私は、アナタを世界で一番愛してる

その気持ちは変わらない

あの日交わした約束を私は守り続ける

だから、わがままな願い事だけと聞いてほしい

最後に少しだけ夢を見せてほしい

二人で過ごす日常を

二人で作る想い出を……

大好きな、あーちゃん

～キャラ紹介～

つくよ しづる

名前 月夜 志弦

性別 女

年齢 16歳

誕生日 2月11日

容姿 腰まで届く黒髪、光の少ない黒目

童顔で、全体的に可愛い印象

全体的にすらっとした体型

隠れ巨乳でDカップある

身長は、155センチ

体重は48キロ

性格 明久至上主義

明久の為に自分の命すら捨てる覚悟がある

基本的に明久以外に甘えず、懐かない

他人の命に関わることでもかなりドライ  
本人は、精神的に明久に依存している  
っていうより依存系ヤンデレ  
ゲームを明久と一緒にやっているのが  
何よりも好き

あと、少々天然が入ってる

学力 全体的に三十点以下

ただし、軍事、戦争、時事問題は完璧に  
答えられる

体育は、得意だが普段は半分も力を  
だしていない

選択問題は、直感で全問正解する

料理 サバイバル料理などが得意

保存食を作るのも得意

昼食は、昭久の作る弁当か

自作のレーションを食べている

しかし、ふつうの料理も上手に作れる

召喚獣 志弦の召喚獣は、3タイプにチェンジし

戦闘中にも変化できる

召喚時は、サモン・くくく

チェンジ時は スタイル・くくく

というワードでチェンジを行う

アサルトスタイル

オリーブ色の野戦服を着て

髪をツインテールに束ね

二本の剣と二丁の銃で戦うスタイル

武装 クサナギムラクモ

対の長剣、二刀流としても扱え、

背を重ねることによって一つの大剣としても

つかえる

カドラIIナドラ

対の銃、カドラはサブマシンガン  
ナドラは、マグナムとなっている。

シフトスタイル

メイド服を着て、ナイフや糸などで

戦いをサポートするスタイル

武装 ピアノ線付き投げナイフ

投げナイフの尻に、

ピアノ線を取り付けてあり

ピアノ線による攻撃や

投げナイフの回収ができる

簡易医療セット

召喚獣の点数回復ができるが

あくまで応急処置程度

初期値より高くすることもできない

ベルセルクスタイル

純白のウェディングドレスを纏い

その身を返り血で朱く染めるスタイル

他のスタイルと違い、チェンジに

理事長か、明久の許可がいる

武装 ラグナーアトナ

志弦の体ほどある

巨大なアサルトライフル

その銃身に大きな刃があり

グリップによるギアチェンジにて

スナイパーライフルや

グレネードランチャーとしても使える

(現実の) 志弦の最終兵器

ブラッドディーエンゲージ

「血染めの白い狂戦士」という二つ名で世界的にも有名な傭兵

こう呼ばれるようになった経緯は十二歳の時

(もちろん偽装の)結婚式に新婦として出席し、そこにいた二十三人の

要人や兵士をラグナーアトナで始末した光景を見た生存者からつけられた

好きなもの あーちゃん 両親 携帯食料

嫌いなもの あーちゃんを傷つける人

修得スキル ピッキング 変装 声帯模写

周囲の評価 明久「見て守らないと危ない子」

雄二「危険なニオイのする女だ」

姫路・島田「最大の敵です」

Fクラス男子「吉井、爆発しろ」

episode 1 くサイカイトキョウガクく

ふと、目が覚めた

懐かしい思い出見ていた

あの時、あーちゃんと交わした契約を

ここは……日本行きの飛行機

と言つても私は国際犯罪者だから

客席や、貨物室にいる訳じゃない

「志弦、そろそろ降下ポイントだ」

「了解です父様」

飛行機の尾翼にもたれていた体を起こし

バックパックの最終点検を行う

「父様」

「なんだい？」

「……ありがとうございます」

「娘のしたいこと、させてあげるのが父親だからね」

異常が無いことを確認し

そのときを待つ

「久しぶりの故郷だから楽しんでおいで」

「はい、電話も忘れないようにしますね」

「楽しみにしてるよ、おやすみ」

「おやすみなさい」

携帯電話をバックパックにしまい込み

私は空へ跳んだ

side 明久

久しぶりにあの事を思い出した

3年くらい、会ってない女の子のことを

その子と交わした約束を

AM 6:00

「こんなに、早く起きるってことは……」

突然だけど僕は、他の人より勘が鋭い

志弦が隣に住んでいたときに

かくれんぼをしたら誘拐され

知らないおじさんに拳銃を突きつけられたり

そんな危ない目にたくさん遭い

その後助けに来た志弦の泣きそうな顔を見て

なるべく遭わないように自然と勘が鋭くなっていった

その勘が今伝えたいことは……

「昼食の時に何かありそう……弁当を用意するか」

というわけで朝食と弁当を作り

時間が余ったから部屋の掃除を少しして

学校に向かった

「おはようじゃ、明久」

「やあ、おはよう秀吉」

「お主が、そんな風に登校すると言うことは……」

「なんか朝から変な感じなんだよね」

「……悪い方じゃないといんじやがのう」

「ごめん秀吉、否定したいけどできないや

そしてHR

「今日からこのクラスに一人増える」

「先生、女子ですか？」

「そのとおりだ『おおおお』……入ってこい」

「失礼します」

あれこの無機質な声、

入ってきた女子は

黒い髪を腰まで伸ばし

顔は綺麗というより可愛らしい

その体は華奢で

全体的に守ってあげたくなくなる感じがしている  
だけど僕はしっている

男でも勝てないほどの強さ

他人には冷淡なその心を

僕を守ると決めたその少女を

そして少女は、僕の元へ来た

だから僕は声をかけた

「久しぶり志弦、3年ぶりだね」

マスター

「お久しぶりです。ご主人様」

『マスター?!?!』

前の仕事メイドさんだったのかな？

僕は志弦の仕事を知ってるけど、他の人にとっては爆弾発言だから  
ねそれ。

episode 2 くテイタイノゴゼンく

side 志弦

あーちゃんは、前に見たときよりカッコよくなって、でも、昔と変わらない素敵な眼をしてる。

私とあーちゃんが約束を結んだ時から変わらない、あの真っ直ぐで、優しい瞳。

私がすべてを敵に回しても守りきると誓った人

「……弦？、おーい志弦」

「……ん、ごめんあーちゃん。ぼーっとしてた」

「志弦らしいけど、気をつけてよ」

「大丈夫」

「お前たちを呼んだのは、ここでイチヤイチャさせる為じゃないんだけどねえ」

「すいませんでした、では依頼の説明をお願いします」

そうでした、今いるのは学園長の部屋

依頼人である学園長に詳細な内容を聞きにきたんです

「志弦、あんたにはいろんな雑務を引き受けてもらう」

「ある人物の弱みを握って来いだったり、ある場所に忍び込んでもらったり、ある物を回収して来いだったり、まあそのときそのときさね」

今回の依頼は、けっこう楽そうだね

「わかりました、ではこちらから提示する条件は三つです」

「一つ目は、ターゲットに対してのある程度の情報を私に教えること」

「二つ目は、私のやり方に口を挟まないこと」

そして一番大事なこと

「三つ目は、殺しは引き受けないこと」

「以上が、私の提示する条件です。守って頂けますか？」

「わかってる、さっさと契約書を出しな」

私は懐から契約書を取り出し、学園長のサインを貰った。

「では、契約成立です」

「じゃあ、依頼が出来たら連絡するさね」

こうして、あーちゃんと私は学園長室を後にしました

side 明久

志弦の自己紹介が終わってすぐに放送で呼ばれたけど、

「僕、いらなかったよね」

別に、志弦の代理人とかじゃないからやることもなかったし、二人が話してるのを隣で見てただけ

クラスの誤解もそのままだから戻るのも怖いけどね

「そんなことない、あーちゃんには契約を交わしたことを見た第三者をして貰ったから」

「けどその第三者って、関係無い人がするんじゃない？」

「本当に関係無い人だったら私が不利になってた、それに……」

「それに？」

「私とあーちゃんの繋がりを覚えて貰う必要があったから」

「そうすれば、あつちは自分が人質をもっていると思つてこの契約を自分の方が有利だと思つてくれる」

「つまり、僕が人質つてことだね……」

そう、という志弦の声をきいてため息をつく

勝手に人質にした上に見届け人にされてしまったけど

ある意味いつものことなのでそこは気にしない

それよりも、昔の約束を覚えてくれたことが嬉しかったなあ

ひつついてくる幼なじみの胸の成長を感じつつ、そう思った。

# episode 3 くカレトノカンケイく

side 志弦

学園長の部屋から帰って来た私達を待っていたのは

「被告人、吉井明久を捕まえろ!!」

「おう!!」

こつちに向かってくる男達

持っていた未使用の鉛筆を取り出し袖口に隠す

わざと咳き込み、手を口にあてる

その動作の途中で鉛筆を投擲

先頭の人の股間に当たり、軍団はドミノのように倒れた

あーちゃんはその光景と私をみて、少し青ざめつつも

軍団とは別のところにいた人たちに話しかけた

「そういえば次の授業ってなんだっけ？」

「体育の予定」「次の授業は、転校生のため召喚訓練だ」…だそうだが突然教室の扉が開き

先ほど担任と名乗った男性がそう告げて去っていった。

side 明久

鉄人が去ったあと

「でだ明久、転校生とはどんな関係だ」

雄二が聞いてきた。

「簡単に言えば…：幼なじみ？」

「なぜ、疑問系なのじゃ…？」

「小学校に入る前から、海外を飛び回っててあんまり一緒に過ごしてないんだよね」

「えっと、ご両親のお仕事とかですか？」

「世界中でセールスしてる」

うん、自分達の能力をね

「へえー、すごいよね！」

「それで電話で話したりはするけど、会ったのは3年ぶりなんだ。」

「今まではどこに住んでいたんですか？」

「フランス、向こうで大きなお屋敷の雇われメイドをしてた」

「…………リアル…………メイド…………!?!」

ムツツリーニとギャラリーが、動揺しているが本職じゃないって志弦がちやんと言ってるんだけどなあ

その時、志弦が僕の袖を引く

振り向いて、固まる

「ところであーちゃん…あの人は誰？」

(あーちゃんを傷つけるような人?)

優しい声音で、だけどその目は凍りつくように

彼女は僕に問いかけた

「えっと、みんな僕の友達だよ」

志弦に敵じゃないと言い聞かせるように

僕はそう言ってみんなに自己紹介するようにいった

「ああ俺は坂本雄二、このFクラスの代表だ。よろしくな」

「私は姫路瑞希といいます。これからよろしくお願いします」

「うちは島田美波、よろしくね」

「木下秀吉じゃ、よろしく頼む」

「…………土屋康太、よろしく」

「…………そう、よろしくね」

先ほどより、声音がすこし冷たい

けどその目はいつもどおりに戻った

みんなは、その変化に気がついていない

そして今、志弦の選別があつたことは知りもしないだろう

今この瞬間、選択を間違えていたら

みんなが笑えることはなくなっていたかもしれない

これからのことにため息をつきつつ次の体育のために着替えはじめた

でも、まだイヤな予感がするんだよなあ

今日が無事に終わるといいんだけど

episode 4 ㄱアットウテキタルボウリヨク

ㄱ

side 明久

4時限目

僕らは体育館に集まり、召喚獣の訓練を行う事になった

「吉井、まずは月夜にお手本を見せてみる」

「わかりました。『試獣<sup>サモ</sup>召喚<sup>モン</sup>！』」

僕の足元に魔方陣が現れて、改造制服と木刀を装備した

デフォルメした僕が現れた。

「今のが呼び出し方だ、月夜やってみろ」

「はい、……『試獣<sup>サモ</sup>召喚<sup>モン</sup>』」

そう言った志弦の足元に魔方陣が……出てこない

その時警告音が鳴り、目の前に

【Error 形式選択をしてください】

という文章が現れた。

みんながその警告文に疑問を持っていると

「あ、そっか」

志弦がつぶやき

「えっと、……『試獣<sup>サモ</sup>召喚<sup>モン</sup>・シフト』」

再び喚び声をあげた志弦の足元に魔方陣が現れ、デフォルメされた

志弦が現れた。

頭にヘッドドレス、服はシックな色合いのエプロンドレスにロング

スカートを合わせ、首にチョーカーをまいた

何故か愛らしいねこみみをつけたメイドがそこにいた

「うおーおーおー!!!」

まあ、あんなものを<sup>!</sup>みたら興奮するよなあと思いつつも

僕はいたって冷静だった

(何回かみたことあるしね)

そして、志弦は召喚獣を動かしはじめた

学園長から説明された私だけにある、スタイルシステムのことをすっかり忘れていた。

これは、私の身体能力をそのまま召喚獣にフィードバックするとシステムが壊れるため、負荷を減らすための制限だそうです。

まあ、いまは訓練だから直接戦闘向きではないシフトで試してみた。

フランスで着てたメイド服とは違って、細かいながらもフリルで装飾された見せるタイプのメイド服みたいだ

すこし動かしてみて、自分の状態を判断し

(体が動かしづらい……拘束具としての働きもあるみたいだけど、これくらいなら普通に動く分にはなんとかなりそう)

(武装はナイフが15本、内11本が投擲専用……持ち手の尻にピアノ線があるから回収は出来るの……かな?強度がわからないから試してみないと)

(あとは、簡易治療セット……使い方はわかるけど召喚獣ってゲガするのかな?それに私の点数じゃ一発受けただけで致命傷だから……)

「では、月夜と吉井「待っててください、西村先生!」どうした姫路?」

女の人が声をあげた

「私が相手として、月夜さんと戦います」

「……別に誰でもいいよ」

あーちゃんじゃなければそこそこ力出しても

「……わかった。では、姫路準備をしろ」

「はい!『試験召喚』」

「では、始め!」

《Fクラス 姫路瑞希 世界史 384点》

《Fクラス 月夜志弦 世界史 28点》

そうして、初めての召喚獣戦が始まった

相手は、大剣を背負った騎士の出で立ちで

その剣を構えこっちに突っ込んでくる

それを受け止めようとして

「志弦！その点数差だと押し負けるよっ！」

「……」コクリ

あーちゃんの声を聞いて受け止めるのをやめ、大剣を手に持ったナイフで捌いた。腕は痺れたけれどこの程度なら戦闘に支障はない

「えっ……!?!」

体勢を崩したのを確認し後ろに下がりつつナイフを4本、足元めがけて投擲

「そんなもので……!」

たいしたダメージにならない、しかしそれでも動きは少し止められた。

突撃、相手の横振りした剣を腰を落とし避けつつ切り裂きながら横をすり抜ける。

振り向き様に4本投擲、左右の腕のあたりを狙う

「どこを狙っているんですか!?!」

当たらない、けれど目的は達成した。

「これで……おしまいッ」

私はひとつのピアノ線を引っ張る。それを引き金に彼女の召喚獣は縛りあげられた。

ピアノ線の通る位置は力の込めにくい場所を選んだため、もがいても彼女は開放されず強く縛り付けられる。

そして止めとしてその胸にナイフを突き立てた。

「………勝者月夜」

こうして私の初戦は勝利に終わった。

episode 5 くヒトトキノキュウソクく

side 明久

昼休みになり僕達は屋上で昼食をとることにした

「そういえば志弦」

「なに、あーちゃん」

「ご飯は持つてきてるの？」

他のみんなとは違い包みや袋を持つておらず  
手ぶらだったため聞いてみると

「あるよ」

といってポケットから固形食料を取り出す

(久しぶりに見たなあ志弦の自作レーション)

みんなが固まっているのを見つ

懐かしい思いでわかりづらい自慢している志弦を見ていた

「しょうがないな……、はい志弦」

弁当の蓋を開け彼女の好物であるコロツケをあげた。

「ん、ありがとう」

口を開けた志弦にコロツケを放り込み、お礼を言われた

ふと周りが静かな事が気になり、嫌な予感がすると思いつつ確認する。

黒い笑みを浮かべる雄二

生暖かい目で見てくる秀吉

僕を写さないように写真をとるムツツリーニ

そして

黒いオーラが見える姫路さんと、美波

そこまで見て、隣を見ると

僕に向ける微笑を崩さず、二人を見る目が少しずつ冷たくなっていく志弦がいた。

ここでとるべき選択肢は……

「み、みんなもほしいものがあればとっていいよ」

志弦にしたことを特別なことじゃないと思わせれば、二人は誤魔化せるはず

志弦は二人の殺気に反応してるだけだろうから落ち着くはず

長年鍛え続けた勘が働き二人が落ち着いたところで

「あのさ、みんな」

「どうしたんじゃ明久」

「もし、放課後暇ならみんなで志弦の歓迎会をしようと思うんだけど」

「いいんじゃないか？」

どうだみんな？と雄二が声をかけると

「……私もいく」

屋上の扉を開けて霧島さんが声をあげた

みんなが若干びっくりして、ああ志弦は気がついてたみたい

「誰？」

「霧島さんっていつて雄二の奥さんだよ」

「おい、何を出任せ言っているんだ」

「夫婦別姓なんだ」

「月夜、まともにとらえるな」

そろそろ認めたらいいのにといいながら弁当を食べ進めていると

「あ、時間だ」

唐突に志弦が呟き、屋上の……

「明久」

「なんだい、雄二」

「屋上にプレハブ小屋なんてあったか？」

「……ボクハナニモイエナイ」

「お、おう」

因みにあのプレハブは監視台らしく

今、志弦が受けた依頼である先生達の動向監視の為に設置した監視カメラを確認する端末が設置しており。その録画データを志弦の持っているメモリに移し変えている。

因みにカメラは志弦の監修の下カモフラージュされているため探査機でも持ち出さなければわからないらしくデモンストレーションで隠した時に学園長は

「今度からは小型探知機を用意しておくさね」  
とこぼしていた。

episode 6　　ソノヒノオワリトスベテノハ  
ジマリ

放課後

みんなと集まり、私の歓迎会をカラオケで終えて

あーちゃんと二人、あのころみたい二人ならんで歩いていた

「そういえば、志弦はどこに住むの？」

「あーちゃんの部屋」

「え、」

「もう、荷物も届いてるはずだよ？」

「一昨日のうちに郵送を手配したから、もう届いているはず」

大屋さんからスーツケースと合鍵を受け取り、部屋に向かう

「僕と同じところでもいいの？」

「なんで？」

「だって仕事の道具とか、整備するスペースなんてないよ？」

「今回の仕事なら、そこまで大量の銃が必要じゃないし」

それに

「あーちゃんと少しでも一緒に居たいっていったら……ダメかな？」

少し間が空いた

「そう言われたら、断れないじゃないか」

笑顔でそう言ってくれたあーちゃん

嬉しくなつてつい、抱きついちゃった

「志弦」

「なに、あーちゃん」

「おかえり」

「ただいま」

あーちゃんが作った夕食を二人で食べた後

テレビをみていた

「そういえば」

「ん？、なーに」

「今回の仕事をいつまで続けるか聞いてなかったなあって」

「今回は長くて2年だよ」

「そんなに長いのか？」

確かに、いつもの仕事だったら半年もかからないけど

「ターゲットが分かってないから、調査期間が必要な」

「それに、複数いる場合だったら見つけるだけで終わっちゃうし」

「大変だね」

「ううん、母様が「今回は長期間だからゆっくり羽を伸ばして来なさい、日本も久し振りでしょうし」っていつてくれたからゆっくりやってくつもり」

「そっか」

その時、私の携帯電話が鳴った

「あ、父様から電話だ」

「もしもし父様」

『やあ志弦、今は大丈夫かい？』

「はい、大丈夫です」

『どうだい、久し振りの日本は？』

「まだ初日ですよ」

『それもそうか』

『それと少しの間、明久君と変わってくれないかい？』

「わかった」

「あーちゃん、父様が話したいって」

「うん、わかった」

携帯電話を渡し、話始める

なんかあーちゃんの顔がどんどん赤くなってきた

「はい、返すよ」

「大丈夫？あーちゃん」

「ちよつと水飲んでくる」

キツチンに向かうあーちゃんを見届けた後、その原因に話を聞いた

「父様、あーちゃんと何を話したの？」

『男二人の内緒話だよ』

「顔がすごく赤くなってたよ」

『そういうものさ』

『あ、静音か』

ら伝言だ『なるべく力は抑えて生活しなさい、その経験は他の時にも役立つはずだから、あとは楽しみなさい』だそうだ』

「うん、気をつける」

力を抑えるのは自分を目立たなくさせる方法の一つ

目立ちすぎるのは職員としては失格だったよね

『それじゃあおやすみ』

「おやすみなさい」

こうして一日目が終わりを上げた

ちなみに翌日目を覚ました明久のとなりには、半裸で抱きついて眠る志弦かいて、朝から真っ赤になったらしい

清涼祭編（原作2巻あたり）

episode7　　マツリノウブゴエ

side 明久

「あー、起きたー？」

パンの焼ける匂いで目を覚ますと

志弦がフライパンで目玉焼きとベーコンを焼いていた  
焼いていたのはいいけれど

「志弦、服を着てよ！」

ネグリジエエプロンというとんでもない格好

僕の目には毒過ぎた

どうか志弦のあの目はまだ寝ぼけてる目だ

「んー？わかったー」

フライパンの中身を皿に移すと寝室に入っっていった

冷蔵庫から牛乳とレタスを取り出し、レタスを刻む

刻んだレタスを二つに分け皿に盛り何気なく時計をみた

8時05分

え？

もう一度みてみた

8時05分

「志弦ー急いで時間がないー！」

志弦に急ぐように伝え、自分も着替える

二人でご飯を食べ皿を流しに突っ込み、部屋を出る

部屋を出たのが8時10分

全力で走っても普通なら間に合わない

「じゃあ、あーちゃんちよつと待ってて」

そういうと、建物の裏手に回り

「お待たせ」

志弦の愛用しているバイクを引いてきた

（フレームからエンジンに至るまで計算されて作られた多数企業製品

継ぎ接ぎバイク 愛称はヒルダ)

知らない間にサイドカーもついている

「学園長に許可はもらってる?」

ダメ元で聞いてみた

「うん大丈夫」

僕は諦めてヘルメットを受け取り、サイドカーに乗り込んだ

—————

side 志弦

こないだまでは乗る機会がなかったから

久しぶりにヒルダにまたがる

それでも私専用チューンナップされたこの子

手に馴染むこの感触

心地よいエンジン音

「じゃあ、いこっか」

アクセルを踏み風になる

—————

「ついたよ、あーちゃん」

時間は8時12分

もちろん安全運転

「おい、月夜」

西村先生が近づいてきた

何か言われる前に用意していた免許と許可証を見せる

「学園長から許可はもらいました、免許もこの通り」

「いや、だが……」

「何か問題でも?」

言い切る、相手に反論の余地を与えない

下手に依頼についての疑いを与えるつもりはない

だって

あなたがターゲットになるかもしれないから

「じゃあ、あーちゃん教室で」

「うん、わかった」

私はヒルダを指定された場所に停め  
サイドカーからアタツシユケースを取り出した

「失礼します、学園長」

「ああ、月夜か…入りな」

「わかりました」

「んで、何の用だい？」

「取りあえず、昨日調べた限りであなたに害に与えるつもりの人、その関係者全てを洗い出した書類です」

「それで、どうしろと？」

「学園長が悪意を感じる相手がいるか、または感じなかった相手がいるか、教えていただきたいです」

「ふん、昼までには見ておくさね」

「よろしくお願いします」

episode 8 サイテンカイシ

今私はあーちゃんと共に試験召喚大会に出ようとしてる  
最初は別の人と出る予定だったけど

学園長が選手交代を宣言して

私はそれを引き受けた

それが「仕事」絡みってことは分かったし

あーちゃんと一緒にいれるのもいいかなと思ったから

「志弦」

「うん？」

「いける？」

「大丈夫」

私は倒れないから

side 明久

「勝者、吉井・月夜ペア」

うん、僕いらないよね

そんな考えが浮かぶほどに終わった一回戦

すんなり終わったため、寄り道しつつ教室に戻ると

「明久！ちようどいいところに来たの」

「どうしたの」

「うちの三年生が営業妨害をしておってな」

「雄二は？」

「ちようど席をはずしておる」

どうしようか悩んでいると、服を引かれる

「志弦？」

「追い払えばいいの？」

「う、うん」

いやな予感しかしないけど僕がやるより

志弦がやったほうが効果ありそうだし

「あ、そうだ秀吉」

「なんじゃ、明久？」

「予備のテーブルつて何処かにないかなあ」

「少しなら部屋にあるじゃろうが……」

「うちで使えないかな？」

「ふーむ、じゃが数が足りんぞ？」

「追加はなんとかなるから」

「了解じゃ、急いで持ってくる」

「お客様」

志弦がクレームをつけていたお客様二人に近づくと

モヒカンの方に掌底を打ち込んだ

そのまま床に倒れ込むモヒカン

志弦は打ち込んだ手を手刀に構え直し

坊主頭の意識を奪う

二人ともやられたことに

気がついていないのが救いだらう

合掌

その後

この事態を見越して机を回収してきた

雄二のおかげで評判を落とす事なく

一旦落ち着いたかにみえた

二回戦は

志弦がネズミの国のチケットで勝利をもぎ取り

教室に戻ってきたら

人の入りが少なかつた

情報整理してみると

別のクラスで悪い噂が流れてるらしい

志弦や姫路さん達それに雄二で

Aクラスに来てみると

さっきの二人組がFクラスの悪評を叫びあっていた

背中に悪寒が走る

空気が冷えてきた方を見ると

「……」

何で、一度で分からないかなあという顔をした

表面上無表情に見える志弦がいた

途端に立ち上がり

教室を出て行く

数分後

教室の入り口から

金髪の長い髪

褐色の肌を惜しげもなく晒した

見事なギャルが入ってきた

というか、それ先生に見つかると捕まるよ

ギャルは二人に近づくと

「ねえー、その男子い」

胸の前で腕を組み、強調する

「俺か？」

「いや俺だろー！」

「あー、二人でいいやあ

ちよつと困っててえ助けて欲しいんだけどお」

手で顔を扇ぎながら、胸元を緩める

「二分かった、手伝いましょう！」

「そお？・じゃ　こっちきてえ」

そうして二人を連れて教室を出る

「ゴメン、志弦迷ってないか見てくる」

「お、おう　何だったんだ……さっきの女」